

昔々ファティマという女性とその息子アリがいた。彼らはとても貧しかった。多くのナツメヤシを持っているスルタンがいたが、彼のナツメヤシはいつも鳥たちに食べられていた。彼は何とかすることに決め、一番の射手であるアリがいいと薦められた。アリには食い荒らす鳥たちを殺すための拳銃が預けられた。彼は野原で鳥を待って見張っていたが鳥はやって来なかった。翌日彼はもう一度鳥を待ったが眠ってしまい、鳥が来るのを見ることが出来ず、目が覚めた時には鳥は去っていた。3日目に鳥はアリが眠っているのを見て彼を起こして言った：「おいおい、ゆっくりと食べさせてくれよ。そうしたら贈り物を進呈しよう」。アリは答えた：「鳥のお前が僕に何をくれるというのかね。スルタンは毎月払ってくれる」。鳥は報酬を約束してゆっくりと食べた。アリは鳥について高いところにある道を通り、鳥は低いところの道を飛んだ[逆? ]。彼らは森の真ん中で再び出会った。アリが大きな家を見つけると鳥が彼に言った：「この家には7つの部屋があるが、7つ目の部屋は開けないように。もし開けたらまずいことになる」。家の中にはありとあらゆる宝物があった。アリは同意して、貧しく暮らしている母親のファティマを迎えに行くことを申し出た。彼らは森の中に住み、アリは母親を信用して鍵を預けて7番目の部屋は開けないように知らせた。母親は好奇心にかられてドアを開けた。彼女は息子が宝物を隠していると思ったからである。彼女が開けるとジンが出てきた。ジンは自由になって大いに喜び、彼女に、息子にこのことを告げたら食べてしまおうぞと脅した。

毎日母親は怯えていた。息子を裏切ったからである。彼女は息子とジンの食事を用意し、ファティマはジンの子供を宿した。アリは母親に、家の中に誰も見当たらないのにどうして妊娠したのか尋ねた。彼女は妊娠したことを否定して食べ過ぎただけだと言ったがついには出産した。アリは母親に言った：「このドアを開けてはいけないと知らせ

たのにあなたは聞かなかった。あなたの子供はジンの子供だ。ムマディ・ビニョカと名付けましょう」。

子供はジンの子だったのですぐに大きくなり 15 歳になった。ジンはファティマにアリを殺そうと提案した。彼はアリがいることに耐えられなくなったからで、ファティマは同意した。彼はココヤシの実を二つ採ることにして言った：「そのうちのひとつの中身を出して私の唾を入れて置く。あいつがそれを飲んだら死ぬだろう」。

しかし、父親といつも一緒にいたムマディ・ビニョカがすべてを聞いていて、兄にそれを食べないように、家では自分に先に食べさせるように告げた。ムマディ・ビニョカは毒を盛ったココヤシを取って、とてもお腹が空いているという口実でそれを食べた。ジンは失敗したので、海に釣りに誘ってアリを殺そうとした。ムマディ・ビニョカは言った：「父は7つの頭を持っている。剣を取って最初の6つの頭を順番に刎ねればいい」。ジンは言った：「7つ目の頭を取ってみろ」。息子は拒んだが、それはジンの最後の頭を取れば彼が生き返ることを知っていたからである。

ムマディ・ビニョカはアリに言った：「父は殺したから今度は加担した母を殺さなければならぬ」。彼は提案した：「彼女の夫の歯を抜いて [飲み物に] 混ぜてから彼女に飲ませよう。そうしたら彼女は死ぬ」。ファティマが家で飲むものを頼んだので彼らは水を与え、彼女は死んでしまった。

彼らは裕福だったので馬で旅に出ることにした。彼らは長い間旅を続け、とある村に着いたが、そこにはジンが支配している大きな溜池があった。村人が水を得るには毎日子供を生贄にしなければならなかった。

彼らはひとりの貧しい老婆に出逢い、彼女に金を与えた。老婆は喜んで彼らに語った：「この村には厄介なことがあるのです。人間を生贄にしないと水を得ることが出来ず、明日はスルタンがひとり娘を捧げることになっています」。ムマディ・ビニョカは

答えた：「そうなのか。僕が水を探しに行つてそのジンを殺してやるよ」。彼は溜池に入り、ジンと戦つて最後にはジンを殺した。

さて、スルタンは娘を宮殿のひとつに住まわせていたが、そこは溜池に面していた。彼女はムマディ・ビニョカが溜池に入つていくのを見ていた。ところでスルタンは、ジンを殺した者に娘を娶わせ、財産を分け与えることを約束していた。ムマディ・ビニョカはジンを殺し、血まみれになつて上がつてきて水を取つた。血を見てスルタンの娘は気を失つた。ひとりの牛飼いがそこを通りかかつてジンが浮いて死んでいるのを見た。彼は血を浴びてスルタンの許を訪れて言った：「私がジンを殺しました！ 私がジンを殺しました！」。牛飼いは尋ねられた：「ジンを殺したのがお前だというのは確かなのか？」。スルタンはジンが本当に死んでいるかを確認めに行つて確認した。スルタンの娘はしばらくしてから意識を取り戻し、ジンを殺したのが牛飼いでないと言つた。彼女の父親は言つた：「私はジンを殺した者にお前を娶わせると約束したし、それがこの者だ」。娘は牛飼いを見て、この人ではないと答えた。スルタンは続けて言つた：「それは確かなのか？ それでは、ジンを殺した者はどこにいるのだ。もしそれがこの地の人間ならば、すべての男は3時に広場に集まるように。ひとりずつ針で身体を刺すことにする。針が折れずに身体に突き刺さつたらそれは探している者ではない。もし針が折れればその男がジンを殺した者だ」。牛飼いはそれを聞いて黙り込み、スルタンの娘は言つた：「ジンを殺したのはムマディ・ビニョカです」。スルタンは答えた：「いいや、彼であるはずがない。そいつはよそ者で嘘つきだ」。

男たちは試したが、ムマディ・ビニョカの番になるまで成功した者はいなかつた。針は彼に触れた途端に折れた。スルタンは、ジンを殺したのが彼であることを認め、ジンを殺した者に自分の娘を娶わせることを約束したのだと彼に言つた。しかし、ムマディ・ビニョカは結婚を断り、自分にはアリという名の結婚していない兄がおり、彼に権

利があると述べた。アリとスルタンの娘マリーは結婚し、アリはスルタンの臣下となった。

ムマディ・ビニョカは花嫁を探す旅に出た。彼はとある酒場で黒髪の美しい娘を見つけ、身元を調べた。彼は彼女が村で最も美しい娘であることを知った。彼らは語り合い、彼は結婚を申し込んだ。婚礼の夜、ムマディ・ビニョカは衣服を脱いだが、剣は身に帯びたままで、寝るときも常に離さなかった。妻は彼に剣を身体から離すよう頼んだが、彼は、それは出来ないが夜の間には彼女を殺すようなことはないから怖がらなくてもいいと答えた。彼が眠った時、妻は相変わらず安心することが出来ず、夫の身体から剣をはずすと彼は死んでしまった。ところでムマディ・ビニョカは兄の写真と連絡先を身に付けていた。妻は彼の兄に知らせ、兄は弟の死に驚いた。彼はすぐに駆けつけて言った：「弟がこんな風に死ぬはずがない」。彼は弟の周りを見渡して尋ねた：「弟がいつも身に帯びていた剣はどこにある？」。妻は、前日に彼の身体から取り上げたと答えた。アリが剣を弟の傍らに戻すと弟は生き返った。ムマディ・ビニョカは剣を取って妻を殺した。彼女は彼を生き埋めにするところだったからである。

彼は兄のアリと共に出立して村に戻った。ところで件の老婆には、自分の娘の死後育てていた孫娘がいた。ムマディ・ビニョカは孫娘と結婚して皆で生活し、スルタンが死んでからはその地方を治めた。